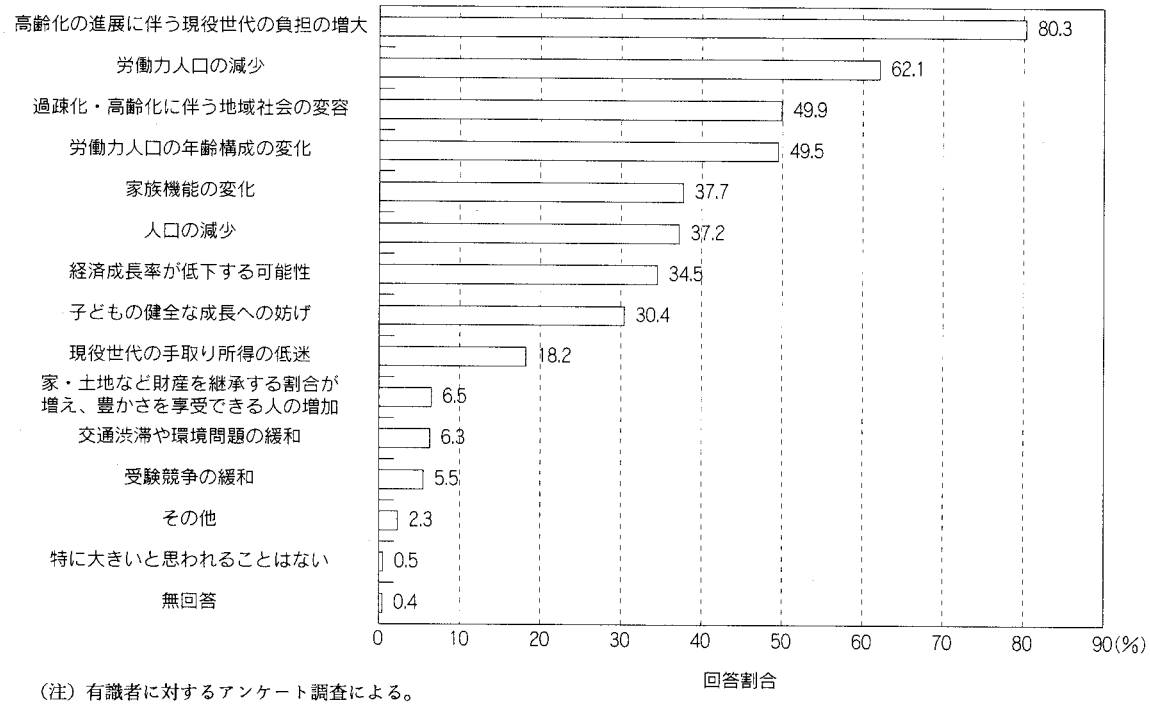

(注) 有識者に対するアンケート調査による。
資料：厚生白書（平成10年版）15頁
1997（平成9）年度厚生科学研究「少子化社会における家族等のあり方に関する調査研究」

図2　少子化が我が国に与える影響（M. A）

子供数が少ないため、親の過保護、多数の子供の集団的活動の経験が少なくなり、「社会性」を身につけにくくなっている。また青少年期に乳幼児と接触する機会が少ないため、親になったとき育児不安に陥ることが考えられる。

③　行政サービスの困難

2025（平成37）年には高齢者人口が6割に達する市町村も現われるから、現在のままでは基礎的な行政サービスも提供不能に陥ることが懸念される。またその頃には大都市の高齢化も深刻になるので社会全体として危機的状態が生み出されるであろう。

④　農地や山林の管理が困難に

農山漁村の過疎化がさらに進むため、農地や山林の管理が困難となり、環境保全や防災、さらに食料生産力の確保が極端に困難な状態になることが心配される。

以上、厚生白書は人口減退が経済的にも社会的にも大きな悪影響をもたらすと指摘している。

（4）「少子化社会は恐くない」

これまで厚生白書が分析した出生力低下の要因とその影響について述べて来たが、最近では少子社会がもたらす影響についての理解も深まり、この外にもいくつかの論説が最近の総合雑誌にもみられるようになった。その例として最近筆者の目にふれたのは山本肇『少子亡国論』（かんき出版1998年5月）、衆議院議員梶山静六「日本興国論」（文芸春秋　1998年6月号）、東京女子大学教授林直義「女が子供を生まない本当の理由」（This is 読売　1998年9月号）、宮島洋・宮本みち子「子供が増えない理由」および船橋恵子「子育てから子育ちへ」（論座　1998年9月号）、和田秀樹「少子化社会は恐くない」（Voice　1998年11月号）などである。

まず和田医師の主張を聞いてみよう。精神科医である和田氏はこの論文の中で少子化社会となる理由と高齢化は恐くない理由について述べている。